

どのような基準で学業成績の結果を出したか。【創造科学系】

「情報Ⅰ」については、1年生であるため、毎時間ノートの写真を学習管理システム上に提出させ、これを平常点とした。これと、最終試験(試験用紙使用、持ち込み不可)により評価した。「ソフトウェアⅠ」では、まず数理的・統計的な考え方について資料に基づき議論した結果をレポート提出させ、これにコメントを与えたほか、Excelの演習結果はファイルを学習管理システムに提出させ、これらを平常点とした。これと最終課題により評価を行った。「プログラミング実習Ⅰ」では、毎時新しい概念が出るよう授業構成し、それに対応した例題を改良させる課題を求めた。これを平常点とし、最終課題及び発表会の内容を併せて評価を行った。

ペーパーテスト以外ではすべて学習管理システムの「課題」機能を用いて提出させ、そこに採点するため、履修者はすべての素点を随時確認できる状態である。システムには「達成度」の数値も表示されるため、どの程度遅れているかが自己判断できる。各自の評価の細部が本人に公開されているため、最終評価に対する疑義等のクレームはない。

実技の授業でもあるので、実際のピアノ演奏、グループ討議での様子、レポートなどを総合的に判断して成績を出している。

授業に対する、熱意、関心、態度を重点にして成績をつけた。

出席、授業態度、試験、レポートで評価を行いました。基準は教員免許状を取得するのにふさわしいかというところに単位を与える基準を置いた。具体的には、授業に対して向き合っているかどうかを判断することに重きを置き、出席回数、遅刻、服装などの評価と、授業中の発言、行動を注視することや、レポートの内容によって見極めた。

レポートでは、内容だけでなくレポートの美的な仕上がりにも留意するよう指導し、それに基づき採点している。試験では、授業内容の理解度を量るマークシート式の設問を課し、学内基準に基づいて評価している。

3~4回の授業ごとに、行った授業内容の理解度を確認するための小テストを行い、その合計点で成績評価に用いた。

実技科目のなので、活動状況を観察し内容の理解度を評価するとともに、授業ノートが毎時間の振り返りレポートになっているので、思考力・判断力、知識・理解を見るために利用しています。

①基礎技能スキルテスト、②各種ゲームの評価、③観察による基本技術の分析レポート、④学習意欲・態度、⑤ルールなど知識の理解度、⑥出席状況などで総合的に評価した。なお、本授業は2名の教員で7回ずつに分けて少人数での指導となるようにした。そのため、2名の教員で①から⑥の観点で、成績評価を提出した。

スポーツ医学:出席と授業態度(悪いものはないので加味せず)、最終テストの成績より
水泳:出席と最終試験(大遠泳の結果、全員完泳したため加味せず)

教員として勤務する場合、あるいは音楽家として演奏活動に従事する場合、いずれも遅刻と欠席は許されないことから、「出席点」を特に重視して成績評価をつけるようにしている。さらに、「知っている／知らなかった」等の大学入学以前に身に付けた知識の多寡や「できる／できない」等の技能ではなく、授業を通じて身に付けた知識や技能の「伸びしろ」を重視して成績評価をつけるようにしている。そのため、欠席ゼロで課題をクリアした学生には授業態度に問題の無い限りA評価を出すようにしている。結果として、A評価が大半を占め、受講者の割合によって評価を調整する相対評価ではなく、絶対評価で成績評価を判定することになる。実技を含む技能系教科では、相対的な評価は意味をなさないと考える。

毎回の授業での学習結果の発表とレポート提出と出席状況により評価を行なった。

期末テスト(40%)、課題レポート(40%)並びに授業態度(20%)を総合評価する。レポートはまなびネットにより提出させていた。期末テストは課題レポートの内容を多く出題し、本当に定着しているかをしっかりと評価した。

作品提出【25%】、レポート【25%】、授業態度【25%】、プレゼンテーション【25%】を総合して成績評価した。最も重要なことは、最後の自由作品の提出とそれに関わるプレゼンテーションを見れば、受講者がしっかりと電氣的技術の習得をし、しっかりと設計・製作ができるかが分かる。受講者が教員となった時、生徒にしっかりと実習の授業ができるかが分かる。

出席数、レポートの内容、授業態度、運動遂行結果を総合的に判断して。

不慣れな環境での野外宿泊生活の為、生活・活動全般への学習意欲と活動内容を評価対象とした。実技活動すべてに困難な課題が多く、集中期間中の目に見える上達は期待できないため、成果は事後のレポートと合わせて評価とした。

出席回数、つまり提出作品数、及び作品自体のクオリティで成績を判定するのであるが、通常のレベルで8点、それよりも良いと9点、授業者と同等またはそれ以上だと10点、また通常より低いレベルは7点、授業をきちんと聞いていない(指示通りに描けていない)ときは6点を与えて、最終的に100点満点にしている。(絵画基礎)
作品評価で学業成績の結果を出した。総合的には良くはないが合格のレベルを60~69、普通レベルを70~79、良い80~89、大変良い90~を大雑把な目安とした。さらに各レベルの中における細かな5つの観点(主題の明確さ、構図、色彩の調和、筆触、明暗での画面の組み立て)で見て、良いか、良くはないかで加減している。(風景写生)

授業の出席回数、取組み態度、試験を総合的に評価して成績をきめている。

出席率、課題に対する取り組み方、提出物を総合的に判断。

基本的内容を把握できているかどうか、それを文章で自分なりに表現できているかどうかを判断した。

演習課題により学業成績を出した。基準としては、授業内容の理解度として、図面の正確な表現、住まい手のニーズを踏まえた間取り計画の視点から成績判定を行った。受講生の成績はおおむね良好で、授業内容を理解してくれたと考える。

授業の中では、作品だけでなく、作品制作時の流れをまとめたレポートを提出して頂くようにしています。その中に書かれた、作品制作を行う工程の中で、どれだけ作品について形や動きを検討したか、また制作時に工夫をしたか等を成績評価に加味しています。また普段の授業時での作品制作に取り組む姿勢も成績評価の判断に取り入れています。

「美術史演習Ⅲ」については、発表内容に関して先行研究の踏まえ方、考察の合理性などの水準とパワーポイントを用いた発表方法、及び事後レポートを含めた授業への参加姿勢を評価の対象とし、到達目標にどの程度達しているかを基準に成績評価した。

「美術史現地指導Ⅲ」と「美術史現地指導Ⅳ」については、事前レポートの内容と現地で見学した作品のスケッチ、見学先での態度を評価の対象とし、到達目標にどの程度達しているかを基準に成績評価した。

「芸術概論A」は毎時間、講義の後で授業時間内に作成するレポートを課し、授業内容のまとめと質問を書くように求めた。そのレポートで出席を確認すると共に授業内容の理解度を測り、到達目標にどの程度達しているかを基準に成績評価した。

「日本美術史概論Ⅰ」と「日本美術史研究Ⅰ」については、授業時間内に作成するレポートの他に学期末にまとめた枚数のレポートを課し、授業内容の理解度や参加の姿勢を対象に、到達目標にどの程度達しているかを基準に成績評価した。

出席、受講態度、服装、指導した内容の理解度・上達度、レポートで総合的に評価した。

出席、態度、スキルテスト。

期末の実技試験と授業態度等

出欠と授業への参加姿勢

電気に関する基礎常識の確認テストの結果と提出させた課題レポートの調査内容を主とし、各授業への出席状況も加味して学業成績を評価した。

実習の場合は出欠を重視し、授業への意欲や積極性、リーダーシップなども加え総合的に評価した。座学は、小テスト、本試験、レポート、出欠など総合的に評価した。

テーマの設定・素材への理解・制作上の工夫・表現力(デッサン)・独創性等を総合的に判断し、提出作品(F10号)並びに制作記録ファイルにより評価採点。

期末に実施した筆記試験70%、授業内課題30%。
個別の事象について理解しているかだけでなく、それらをどのように関連づけて解釈しようとしているかも評価のポイントとしています。

試験の点数を80%、あとは、授業の出席、授業態度を加味して採点。

フェルト技法2種、染色2種+防染技法2種、織り、編み、組みのそれぞれの技法について小作品の提出を求め、その作品を基に評価を行った。それぞれの基本技法の習得が認められることを単位認定の基準とした。作品ごとに3段階の評価を行うとともに、独自の工夫や作品の完成度の高さ、授業外にも制作に取り組むなどの意欲の高さなどに対しては加点し、すべての作品の合計点を素点とし、評価とした。